

# 國學院大學學術情報リポジトリ

2009年度のトピック

国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001779">https://doi.org/10.57529/00001779</a>

## 国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」

2009年9月20日に、國學院大學AMC棟1階常磐松ホールにて、国学院大学研究開発推進機構日本文化研究所と科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」の主催によって国際研究フォーラム「映画の中の宗教文化」が行われた。

本フォーラムは、映画を宗教文化教育の教材の一つとしてとらえた場合に、そこにどのような問題点と可能性があるのかについて幅広く議論することを目指すものであり、それぞれ5名ずつの発題者とレスポンドの発題者とコメントを受けて最後に総合討議を行うという形で進行された。以下に発題の題名を発題順に記す。なお、司会は井上順孝が務めた。

- ◇ 第一発題者 近藤光博(日本女子大学)「映画を教材にして比較宗教の理論的課題を明らかにする——ひとつの試みの報告」、レスポンド 富澤かな(東京大学)。
- ◇ 第二発題者 中町信孝(甲南大学)「アラブ歴史映画に見るイスラームとナショナリズム」、レスポンド 白杵陽(日本女子大学)。
- ◇ 第三発題者 ジョリオン・トーマス Jolyon Thomas(米・プリンストン大学)「西洋から見た日本映画の宗教性」、レスポンド 櫻井義秀(北海道大学)。
- ◇ 第四発題者 ジャン-ミシェル・ビュテル Jean-Michel Butel(仏・国立東洋言語文化大学)「アニメはどんな宗教を

語ってくれるか—『平成狸合戦ぽんぽこ』に見る日常宗教」、レスポンド 西村明(鹿児島大学)。

- ◇ 第五発題者 グレゴリー・ワトキンス Gregory Watkins(米・スタンフォード大学)「宗教と映画を教える際の新しい傾向」、レスポンド 山中弘(筑波大学)。

続いて各発題の内容について簡単に紹介する。

第一発題者 近藤光博(日本女子大学)「映画を教材にして比較宗教の理論的課題を明らかにする——ひとつの試みの報告」、レスポンド 富澤かな(東京大学)。

近藤は、まず宗教学という学問そのものが抱えている理論的課題、すなわち宗教と世俗の二分法において成立している「宗教」という言葉が、今日的状況にうまくあてはまっていないという問題をどのように乗り越えるかという問題意識について述べ、その展開において抽象的な問題に具体的なイメージを与えるために映画を用いているとして、実際にいくつかの映画を挙げてこれを説明した。

これを受けてレスポンドの富澤は、映画に含まれている虚と実をどのように切り分けるか、またドキュメンタリーの虚と実についても、どのように取り扱うことができるのかといった問題提起を行った。

第二発題者 中町信孝(甲南大学)「アラブ歴史映画に見るイスラームとナショナリズム

ム」、レスポデント 白杵陽（日本女子大学）。

中町はまず教材としての映画を三つのレベルから捉えることができるとし、第一に映画を歴史の再現として捉えるある意味単純なレベルがあり、第二にそこに作り手の脚色があることを指摘するレベルがあるとした。しかし、この第二のレベルに関して逆に教師の恣意的な読み込みを避けるためにも、第三のレベルとしてその映画が成立している社会・時代状況に目を向ける必要があると述べた。

具体的な例として幾つかのアラブ歴史映画を取り上げ、例えばハリウッド映画とエジプト映画では同じ出来事が異なる形で描かれていることについて説明し、またそこに監督と観客が共有している前提を見て取ることができることを指摘した。

これを受けてレスポデントの白杵は、中町が取り上げたユーセフ・シャヒーンという映画監督の宗教的背景について補足した上で、日本の学生があらかじめ持っているイスラームイメージを投影する形で映画を誤読してしまう可能性があることを、過去の授業の例に触れながら指摘した。

第三発題者 ジョリオン・トーマス Jolyon Thomas（米・プリンストン大学）「西洋から見た日本映画の宗教性」、レスポデント 櫻井義秀（北海道大学）。

ジョリオンは、映画と宗教という問題が近年学問的に研究されるようになってきたことに触れながら、しかしその方法についてはまだ十分に検討されていないとし、受容理論やカルチュラル・スタディーズの手法を取り入れて観衆の受容の仕方に目を向けることの重要性を強調した。

また一口に映画と宗教といっても、単に背景、あるいは美的・表面的な記号としてのみ宗教的な事物を用いている映画もあれば、逆に宗教団体などによって明らかに教化的な目

的をもってつくられた映画もあるとし、また結果として宗教的に受容されるような映画もあると述べた。そしてこの最後の種類の映画とその受容についての研究にはやはり観衆の側に目を向ける必要があると指摘した。

これを受けてレスポデントの櫻井は、観衆の受容に着目することの重要性を再確認した上で、なお作り手側の意図を含めた映画の脈絡や背景などもやはり押さえておく必要があることを、ドキュメンタリーを用いた授業の例に触れながら述べた。

第四発題者 ジャン-ミシェル・ビュテル Jean-Michel Butel（仏・国立東洋言語文化大学）「アニメはどんな宗教を語ってくれるか—『平成狸合戦ぽんぽこ』に見る日常宗教」、レスポデント 西村明（鹿児島大学）。

ビュテルは、フランスで現代日本文化入門という授業を行う際に、高畑勲監督による『平成狸合戦ぽんぽこ』というアニメーション作品を用いていることについて述べた。

これは一つには日本のゲームや漫画、アニメーションに関心を持つフランスの若い学生たちに対してより受け入れられやすい形で日本文化への入り口を提供するという戦略であるが、他方で『ぽんぽこ』に多くの宗教的要素が見られることにもよる。もちろん『ぽんぽこ』は直接宗教を取り扱う映画ではないが、逆に非一貫的に提示されている宗教的要素が、かえって日本文化のなかに組み込まれている諸々の宗教的要素をうまく表しているのではないかと論じた。

また、映画の中のひとつのクライマックスに狸の変身による妖怪の大パレードがあり、これを見た学生たちはそこに強いエキゾティズムを感じるという。しかし、映画の中の登場人物たちは必ずしもその妖怪たちを宗教的には受け取っていないということが決定的に重要であるとビュテルは指摘し、日本人をエキゾティズムにおいて捉えることを再び相対

化することの必要性を述べ、またそうしたメッセージをも発している点において『ぼんぼこ』がすぐれた教材足り得るとした。

これを受けてレスポンドの西村は、映画と宗教を考える際に、単に映画の中に宗教文化的な要素を見出すだけでなく、宗教でもって映画を見るという視点、あるいは方法が重要なのではないかと指摘した。また例えば『ぼんぼこ』を一つの焦点として日本とフランスの学生がお互いの捉え方について論じ合うことで、更に認識を深めることができるのではないかという見通しについて述べた。

第五報告者 グレゴリー・ワトキンス  
Gregory Watkins (米・スタンフォード大学)  
「宗教と映画を教える際の新しい傾向」、レスポンド 山中弘 (筑波大学)。

ワトキンスは、映画と宗教について実際にどのような授業を行っているのかについて、小集団による開けた議論を中心にしていることや、またそれを通じて学生達に議論のための共通の土台を作っていくことといった手法的なことについて触れ、また取り上げる教材について、古典的な宗教理論を含む課題図書

と様々な傑作映画を組み合わせていることなどを詳しく説明した。

そして授業を通じて学生達がそもそも映画とは何か、宗教とは何かといった根本的な問題について思索を深めること、また映画という独自の性格を持つメディアにおいて、そこにはある種の宗教表現やあるいは宗教体験が立ち現れてくることについて考えるようになることについて述べた。

これを受けてレスポンドの山中は、ワトキンスの提示した授業がある種の範型となり得るとし、そこで映画が単に宗教理解のための道具として用いられているのではないことが重要であると指摘した。

その後フロアとの活発な議論が交わされ、映画が宗教文化教育において大きな意味を持つということについて参加者の共通理解が深められ、これまで必ずしも十分に議論されてこなかった面がある映画と宗教という問題について今後より議論が展開させられていく可能性を感じさせるフォーラムとなった。

なお、本フォーラムの内容をまとめた報告書が刊行されている (本号出版物紹介参照)。

(星野靖二)